

令和元年6月24日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16H03344

研究課題名(和文) 真矛盾主義とアジア思想：分析アジア哲学の国際研究拠点形成

研究課題名(英文) Dialetheism and Asian Thoughts: Towards the Formation of International Research Hub for Analytic Asian Philosophy

研究代表者

出口 康夫 (Deguchi, Yasuo)

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：20314073

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,910,000円

研究成果の概要(和文)：東アジアの「空」思想の現代哲学的・論理的解釈を行い、それが様々な仕方で、真なる矛盾の存在を認める真矛盾主義として解釈できることを示した。例えば、中国仏教の三論思想における空は、超二項対立的(不二的)な実在のあり方を意味するが、その実在の不二性を言語的に表現する一つの仕方が矛盾である。また「空假中」という三諦として展開された天台思想における空概念は、実在そのものの(互いに異なった三諦という性質を同時に持つという意味で)矛盾したあり方であることが示された。また空概念を絶対矛盾的自己同一として展開した後期西田哲学では、矛盾としての空は全ての実在を生み出す創造性をも意味していたことが明らかにされた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、大乘仏教に代表される東アジア思想が、真なる矛盾の存在を認めていたことを改めて示すとともに、真なる矛盾に籠められていた意味をも明らかにした。このことは、東アジア思想は哲学の名に値しない、単なる宗教的ビジョンにすぎないことを意味するのではない。本研究が行なったように、矛盾を論理的に無害化するパラコンシスタント論理と、真なる矛盾を認める真矛盾主義を援用することで、矛盾を認める東アジア思想を、筋の通った哲学的立場として理解することも十分可能なのである。東アジア思想に対するこのような解釈は、文明間の対話を促進する思想的基盤を提供し、今日の世界情勢に適した多元的な世界観を切り開く契機となりうる。

研究成果の概要(英文)：This project aims to reinterpret East Asian philosophy of Emptiness in terms of contemporary philosophy and logic, asking if it commits dialetheism, according to which some, but not all, contradictions are true. It concludes, for instance, that, for Sanlun school of Chinese Buddhism, emptiness means the trans-dichotomous of the reality, and can be expressed as contradictions in our language. On the other, Tiantai School developed the concept of emptiness as three truths, and effectively claimed that the reality is free of any conceptual distinctions, but instead, contradictory in that it has some contradictory conceptual properties. Late Nishida advocated the logic of absolutely contradictory self-identity, that can be taken as his variant of emptiness. It can be interpreted as non-transitive identity, and be shown to imply some true contradictions. Here true contradiction means not merely non-duality but also productivity of basic ontological entities such as the world, and self.

研究分野：哲学

キーワード：東アジア思想 パラコンシスタント論理 真矛盾主義 三論思想 天台思想 西田哲学

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究は「分析アジア哲学」という新分野の勃興を背景に企画された。分析アジア哲学とは、仏教・(仏教以外の)インド哲学・儒教・老荘思想・京都学派の哲学など、古典的ないし近現代のアジア思想を、分析哲学を中心とする現代哲学や、現代の古典的ないし非古典論理学の概念ツールを用いて再解釈し、そこから 21 世紀の新たな哲学を創造することを目指す哲学ムーブメントである。当初、南アジア(インド・チベット)の仏教思想や儒教・道教といった中国の古典思想を対象として始まったこのムーブメントは、本研究が開始された時点では、いよいよ、その対象を、中国ないし東アジアの仏教思想や京都学派の哲学へと広げつつあった。このような情勢を受けて、本研究は、従来の分析アジア哲学の研究蓄積を活用しつつ、東アジア思想を対象とする初の本格的な国際共同研究として企画された。

2. 研究の目的

大乘仏教思想を始めとする東アジア思想を現代哲学的に再解釈するに際して、本研究は、東アジアにおいて様々な仕方で語られてきた「空」概念に焦点を絞ることとした。その上で、「東アジア思想における「空」概念は「真なる矛盾」を含意しているのか、どうか」、「もし含意しているとすれば、それは「真なる矛盾」に対して、どのような意味・意義を与えているのか」という問が主要課題として立てられた。言い換えると、東アジアの「空」思想を、真なる矛盾を受入れる形而上学的立場である「真矛盾主義(dialetheism)」として解釈できるかどうか、本研究の主要課題の一つとされたのである。

一方、分析アジア哲学自体、世界的に見てもまだ新しい研究領域である。またアジア思想を対象とするとは言え、このムーブメント自体は、これまで主として英語圏で展開されてきた。それに対して、本研究では、研究代表者が所属する研究機関を一つのハブとする形で、分析アジア哲学のネットワークを東アジア、東南アジア等、アジア諸国・諸地域に展開し構築することも目指されていた。

3. 研究の方法

上記のように南アジアの仏教思想に関しては、すでに分析アジア哲学の研究がある程度蓄積されている。その中には、南アジア仏教思想、特にインドの大乘仏教思想の創始者であるナーガールジュナの哲学を真矛盾主義と解釈できるかどうかについての議論も含まれている。一方、東アジアの仏教思想に関する分析アジア的研究はこれまでほとんどなされてこなかったのが実情であった。そこで、本研究では、まず大乘仏教思想を含む東アジアの思想のうち、矛盾について言及している(ないしは言及していると解釈できそうな)ものを選び、その主要テキストを選択し、それらを集中的に読解しつつ、場合によっては現代哲学や現代論理的の概念装置をも動員して、それらを解釈するという研究手法がとられた。

具体的に対象として選ばれたのは、維摩経思想、老荘思想、中国仏教の三論・天台仏教思想、中国禅思想、道元思想、西田幾多郎の哲学である。これらの思想の基礎テキストを選定し、国際的な研究チームを編成して、それらの読解に取り組んだ。その際、中国語・日本語の原典テキストに加えて、それらの英訳テキストも随時参照することで、全体として英語で議論を進めた。

上記のように、本研究の議論の主調は、これらの東アジア思想が真矛盾主義として解釈できるかどうかにかかれたが、その際、現代の非古典論理学、特に、矛盾を論理的に無害化し、それを認める論理体系であるパラコンシスタント論理のツールを動員し、それらの思想の内容を論理的に定式化する試みもなされた。

4. 研究成果

本研究では、上で列挙した東アジア思想のいずれもが、真矛盾主義的に解釈できるという結果が示された。一方で、真なる矛盾の意味も、それぞれの思想において微妙だが有意に異なることも示された。以下、いくつかの思想に即して、成果として得られた具体的な解釈を概観していく。

まず中国三論思想においては、不二的、即ち超二項対立的なあり方をしていると想定された実在を、二項対立的な言語によって表現する際に、矛盾表現が採用されるケースがあるという事態が確認された。このことは、三論思想において「真なる矛盾」は、あくまで、実在の不二性を、言語的に表現する「一手段」として捉えられていることを意味する。言い換えると、実在の不二性は、矛盾以外の言語的方法(例えば、一種の無限後退的な構造)によっても表現可能であるとされているのである。このことは、真なる矛盾は超二項対立的な実在のあり方を表現する言語的なデバイスにすぎず、実在そのものが矛盾したあり方をもっていることまでは含意されていないことを意味する。ここでは、実在はあくまで不二的ではあるが、矛盾的である必要はないのである。

一方、中国天台思想は、よりダイレクトに、実在そのものが矛盾しているという考えを含意していると解釈された。「円融三諦」を説く天台思想は、二項的区別のみならず三項的区別も含めた、一切の概念的な区別を実在に対して認めないというラディカルな立場に立っている。天台思想においては、実在は一切のカテゴリ分けを受入れない、いわば一様な性質を持った存在として捉えられているのである。このことは、だが、結果として、実在を、(三諦とし

て表現されていた)互いに概念的に矛盾する三つの性質を一様にあわせもった存在として描くことを意味するのである。つまり、ここでは実在そのものが一様であるが矛盾した存在として扱われているのである。

さらにその後期哲学において「絶対矛盾的自己同一」の論理の構築を試みた西田幾多郎もまた、天台思想と同様、実在そのものに矛盾構造を見て取っていたと解釈することができる。後期西田の(絶対)矛盾的自己同一の論理は、(形式的言語ないしは推論規則の体系というより)実在についてのある種の論理モデルと解釈することができる。このモデルでは、単一の「世界」全体、複数の「自己」、複数の「物体」の間にそれぞれ一対多の関係が設定されているが、この一対多関係こそが、西田が矛盾的自己同一関係と呼んだものである。(例えば、一つの世界が多数の自己と矛盾的自己同一関係にあり、一つの自己と多数の物体もまた矛盾的自己同一関係にあるとされる。)本研究は、この一対多関係としての矛盾的自己同一関係を、パラコンシスタント論理の枠内で定式化される「非推移的な同一性(non-transitive identity)」と捉える解釈を提案した。例えば、世界 w と自己 a 、自己 b という二つの自己との間に非推移的な同一性関係が成り立つとは、世界はそれぞれ自己 a と自己 b と同一であるが、自己 a と自己 b は互いに同一ではないとことを意味する ($w = a, w = b, a \neq b$)。また本研究は非推移的な同一性に加え、非推移的なライプニッツ則をも、その絶対矛盾的自己同一関係の解釈に組み込む。ここで言う非推移的なライプニッツ則とは、例えば、世界 w は自己 a と自己 b の全ての性質を共有するが、自己 a と自己 b は世界 w の全ての性質を共有せず、結果として、自己 a と自己 b の間には互いに全ての性質を共有しあうという関係が成り立たないことを意味する。このような現代の非古典論理を用いた絶対矛盾的自己同一論理モデルの再解釈においては、世界と各々の自己において矛盾が発生することとなる。というのも、例えば自己 a と自己 b は(例えば自己 a が「男性である」という性質を持ち、自己 b が「男性ではない」という性質を持つといった仕方)互いに相矛盾する性質を持ちうるが、その場合、先の非推移的なライプニッツ則によって、世界 w は「男性でありかつそうではない」という矛盾した性質を持つことになるからである。このような解釈は「世界と自己は矛盾している」という西田本人の主張と合致する。このように再解釈された西田の絶対矛盾的自己同一の論理は、単に真なる矛盾を認めるのみならず、実在の一部(即ち世界 w)において全ての矛盾、従ってまた全ての命題が真であるという些末主義(トリビアリズム)が成り立っていることを承認していることになる。ただ、ここでのトリビアリティは、実在全体に広がっているのではなく、あくまでその一部の「世界 w 」においてのみ生じているという意味で、局所化された(ないしは一カ所に隔離された(compartmentalized))事態である。このように、実在において成り立つ全ての性質を兼ね備え、結果として矛盾した存在とされる後期西田の「世界」は、エックハルトの「神」と似たような存在論的特徴を持つことになる。このような、エックハルト的な「神」としての西田の世界は、トリビアリティを引き受けることで、単に全ての二項対立を超越しているのみならず、全ての実在の性質がそこから生み出される、実在の性質の「母胎」的な地位を占めるのである。

このような解釈を施すことで、東アジア思想では、南アジア思想に比べても、より明確で顕在的な仕方である矛盾にコミットしているケースが見られることが明らかとなった。またそこで語られる矛盾の意味は、不二なる実在の言語的表現の一つ(三論思想)実在そのものが持つあらゆる概念的区別を超えたあり方(天台思想)さらには全ての実在の性質を生み出す豊穡性(潜在的生産性)といった、様々な意味・意義を与えられてきたことも明らかになることができた。

本研究の立場に立てば、以上のように解釈された「真なる矛盾」こそが、東アジア思想における「空」概念の内実には他ならない。それは、実在の非二項対立的あり方を表す「言語表現」の一つであったり、一切の概念的区別を超えた実在のあり方であったり、さらに全ての実在を生み出す実在の根源的な生産性を意味してきたのである。

上記のような研究成果は、二冊の英文研究書として取りまとめられつつある。一つは研究代表者(出口)と海外協力研究者(J. Garfield, G. Priest, R. Sharf)による共著、*What Can 't Be Said* である。本書は現在、Oxford University Press から出版準備中である。もう一つは、研究代表者が編者を務め、本研究の研究分担者・海外研究協力者を含む研究者が寄稿する論文集である。この論文集も、現在、編集作業を進めており、最終的には英語圏の有力なアカデミックプレスからの出版を目指している。

またアジアにおける分析アジア哲学の研究ネットワークの構築という点でも、本研究は顕著な成果を挙げた。本研究では、研究代表者が所属する機関で数多くの国際ワークショップや国際会議を開催する一方、研究代表者や研究分担者が、海外(特にアジア地域)での分析アジア哲学の研究発表を積極的に行なってきた。その結果、研究代表者の所属機関は、分析アジア哲学の世界的な研究拠点の一つとして国際的にも認知されるにいたった。その一例として、同機関は、台湾政府によって若手研究者の派遣先として三期連続して選ばれ、分析アジア哲学を研究するポスドク研究者を受入れている。また本研究期間中、欧州の若手研究者を、分析アジア哲学を研究テーマとするポスドク研究者として受け入れた。さらに中国の山東大学とも、分析アジア哲学をテーマとする共同研究が開始されている。さらに台湾の国立政治大学、韓国のソウル大学、シンガポールのシンガポール国立大学とも、分析アジア哲学を主要テーマとする大学院生コンファレンスを毎年開催するにいたっている(香港城市大学とタイのチュラロンコン大学も、本年度から、この大学院生コンファレンスに加わる予定である)。

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 17 件)

出口康夫, ポスト 3.11 と代受苦の思想, 『<ポスト 3.11>メディア言説再考』, 113-137, 2019.

Onishi Takuro, Bridging the two plans in the semantics for relevant logic, *New Essays on Belnap-Dunn Logic*, 2019.

Omori Hitoshi And Wansing Heinrich, On contra-classical variants of Nelson logic N4 and its classical extension, *The Review of Symbolic Logic*, 11, 805-820, 2018.

Omori Hitoshi, Towards a bridge over two approaches in connexive logic, *Logic and Logical Philosophy*, 2019.

Omori Hitoshi and Weber, Zach, Just true? On the metatheory for paraconsistent truth, *Logique et Analyse*, 2018.

Omori Hitoshi, From logics of formal inconsistency to logics of formal classicality, *Logic Journal of the IGPL*, 2018.

Naoya Fujikawa, Exploring Routley's Nuclear Meinongianism and Beyond, *The Australasian Journal of Logic*, 15, 41-63, 2018.

Szmuc Damian and Omori Hitoshi, A note on Goddard and Routley's significance logics, *The Australasian Journal of Logic*, 2018.

Yasuo Deguchi, Late Nishida and Dialetheism, 第五回日中哲学フォーラム「思索と対話による日中交流の深化・境界を架橋する哲学の役割」予稿集, 359-385, 2017.

Omori Hitoshi and Szmuc Damian, Conjunction and Disjunction in Infectious Logics, *Logic, Rationality, and Interaction. LORI 2017*, 268-283, 2017.

Casati Filippo and Fujikawa Naoya, Nothingness, Meinongianism and inconsistent mereology, *Synthese*, 1-34.

Takuro Onishi, Understanding negation implicationally in the relevant logic R, *Studia Logica*, 104(3), 1267-1285, 2016.

Filippo Casati and Naoya Fujikawa, Nonexistent Objects as Truth-Makers: Against Crane's Reductionism, *Philosophia*, 44(2), 423-434, 2016.

Hitoshi Omori, A Note on Wansing's expansion of Nelson's logic, *Reports on Mathematical Logic*, 51, 133-144, 2016.

Michael De and Hitoshi Omori, Classical and Empirical Negation in Subintuitionistic Logic, *Advances in Modal Logic*, 11, 217-235.

Michael De and Hitoshi Omori, There is more to negation than modality, *Journal of Philosophical Logic*, 2016.

Deguchi Yasuo, Tientai and Takahashi on the Three Satyas, 『哲学研究』, 600, 1-16, 2016.

〔学会発表〕(計 20 件)

Deguchi Yasuo, Self-as-We and Its Ethical Implications, 2nd Joint Workshop of NTU-Kyoto University on "Self and Subjectivity: from Multi-cultural and Interdisciplinary Perspectives", 2019.

Omori Hitoshi, Observations on the 'just true' problem, *2nd Veritas Philosophy*

Conference, 2018.

Fujikawa Naoya, Eloquence of Silence? : A Note on Dogen on Silence, *New York Workshop for the Cosmos of Dogen*, 2018.

Fujikawa Naoya, Ineffability and Nonobjecthood, *What's So Bad about Dialetheism?*, 2018.

Fujikawa Naoya, Speaking of Nothingness, *Colloquium: Recent Issues in Philosophy of Language*, 2018.

Deguchi Yasuo, Self as We: Its Structure and Ontology, *Kyoto University - UC San Diego Workshop on Self II*, 2018.

Deguchi Yasuo, Self as We: Toward a Revival of East Asian Holistic Self, *Conference for Contemporary Philosophy in East Asia 2018*, 2018.

Deguchi Yasuo, Green Nishida: Late Nishida's Self and Its Potentiality for Eco-philosophy, *Seminario Internacional de Filosofia Japones*, 2018.

Deguchi Yasuo, Self as Anyone: Dogen & Environmental Philosophy, *The 3rd Biennial International Conference of the Group 4 Universities in East Asia on Buddhist Studies*, 2018.

Yasuo Deguchi, 分析アジア哲学とは何か?:後期西田哲学の再構築, 筑波大学哲学・思想学会第38回学術大会, 2017.

Yasuo Deguchi, Late Nishida and Dialetheism, 第五回日中哲学フォーラム:思索と対話による日中交流の深化:境界を架橋する哲学の役割, 2017.

Yasuo Deguchi, Late Nishida and Dialetheism, *Dialetheism and Related Issues in Analytic Asian Philosophy: An International Workshop*, 2017.

Yasuo Deguchi, Satomi Takahashi and Tientai Philosophy, *2nd Meeting of the International Society for the Study of Takahashi Satomi*, 2017.

Naoya Fujikawa, Eloquence of Silence, *Dialetheism and Related Issues in Analytic Asian Philosophy*, 2017.

Takuro Onishi, An inferentialist approach to the sevenfold predication in Jainism, *Dialetheism and Related Issues in Analytic Asian Philosophy*, 2017.

Takuro Onishi, A formalization of the Jaina theory of sevenfold predication, in Symposium on Frontier of Analytic Asian Philosophy, *The 3rd Conference for Contemporary Philosophy in East Asia*, 2016.

Filippo Casati and Naoya Fujikawa, Inconsistent Grounding: Cases from the Kyoto School, in Symposium on Frontier of Analytic Asian Philosophy, *The 3rd Conference for Contemporary Philosophy in East Asia*, 2016.

Hitoshi Omori, Towards a unification of paraconsistent logics, *Workshop on Philosophical Logic*, 2016.

Yasuo Deguchi and Hitoshi Omori, Bhaviveka's Negations Viewed from a Contemporary Viewpoints, in Symposium on Frontier of Analytic Asian Philosophy, *The 3rd Conference for Contemporary Philosophy in East Asia*, 2016.

Yasuo Deguchi, The Structure of Shamelessness: A View from Fukushima, *2nd East-West Philosophy Forum: Humility, Faith and Science in the Eastern and Western Traditions*, 2016.

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕
出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等
<http://www.aap.bun.kyoto-u.ac.jp>

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：藤川直也
ローマ字氏名：Naoya Fujikawa
所属研究機関名：東京大学
部局名：大学院総合文化研究科
職名：准教授
研究者番号(8桁)：40749412

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。